巻頭エッセイ　言葉と向き合う

ぼくは、国語がきらいだった

言語研究者　塩田雄大

たしか小学校低学年のとき、国語のテストでこんな問題が出た。

「正しい言い方に直してみましょう。

【ママ、あれ買って。】」

担任の先生が作ったのではない、既製品のプリントだったが、ぼくはこの問題を作った人の意図がまったくわからなかった。「正しい言い方」って、いったい何を求めてるんだろう。考えた末に、こう書いた。

【おかあさま、あれを買ってあそばせ。】

返ってきた答案は、バツ。どうも正解は、【おかあさん、あれを買ってください。】であったらしい。そんなくだらないことを、なんで質問するんだ。それに、「買ってください」が「正しい」としたって、「買ってあそばせ」がバツってのはあんまりだろう。小学生なりに、思いっきり「正しく」ふるまったつもりだったのに。なんだかばかばかしくなって、ドッジボールや野球なんかよりもずっと楽しそうに見えた漢和辞典を読んでいた。すげえ、言偏（ごんべん）の付いた漢字っていくつあるんだよ。漢字ってだれが作ったんだ。わくわくする読書だった。

中学生のとき。形容詞の活用で、「かろ、かっ、く、う、い、い、けれ、マル」。これが、わけがわからなかった。「い、い」は同じ形なのに、「終止形」「連体形」と別のグループにする。で、「かっ、く、う」は、みんな違う形なのに、一つの「連用形」にまとめる。「用言に連なる」から「連用形」？　ちょっと待て、「近かった」の「た」は助動詞で、用言じゃないだろ。「近くにある」の「に」だって、助詞だ。あと、「近う」（ちぢう）「寄れ」なんて普通に言う現代人、いるか？　疑問ばかりが膨らんで、でも「かろ、かっ、く、う、い、い、けれ、マル」の呪文だけは覚えなくちゃいけなくて、なんだか息苦しくて、土曜日の「ひょうきん族」だけが楽しみだった。

国語のテストっていうのは、自分がほんとに考えたことじゃなくって、こう回答するのが普通は望ましいとされてるんですよ、っていう唯一の答えを書いていくゲームみたいなもんかと達観しかけたころ。高校で、すばらしい国語の先生に出会った。一つの文章をもとに、どんな解釈が可能なのか、どんな読み方ができるのか、先生自身が毎回授業でうんうん唸って考え込む姿を見せるという、夢のような授業だった。そうか、正解は一つじゃなくっていいんだ。いろいろあるはずなんだ。憑（つ）き物が落ちて、このころからぼくはだんだんと国語が好きになり、成績も平均点を取れるようになってきた。

大学は国文科に進んだ。ここで、小学生に【おかあさん、あれを買ってください。】を「正しい」言い方として答えさせようとしたことも、形容詞活用の呪文の謎も、大人の事情として自分なりに理解できるようになった。さて、ぼくは将来なにで飯を食っていこうか。いちおう人並みに悩み、自分にはこういうことはたぶんできない、あれも無理、とピンボールのボールみたいに考えが行ったり来たりして、最終的にことばの研究者という選択肢が残った。小中学校での苦悩には意味があったわけで、人生に無駄なことなんて、一つもないんです。

大きくなってからだんだん気づいてきたことだけども、どうもぼくは、ことばそのものに異様に関心があるというか、気になりすぎるという、特異体質らしい。普通の人だったらなんともないような花粉の量でもくしゃみと鼻水で悶絶してしまうような、どうでもいいことばの問題が気になって気になってしかたがないという、生まれつきの言語的花粉症であるらしいのだ。ぼくはこの特異体質を、逆手にとって利用してやることにした。

ちょっとしたことばの問題なんて、普通の人にはなんのかかわりもないこと。みたいに思われてる。でも、そういう一見些細なことばの問題に日々さらされることで、知らず知らずのうちにみんなの体は少しずつむしばまれてるんじゃないか。ぼくみたいに、毒ガスにいち早く反応するカナリアみたいな特異体質の人間が、斬り込み隊長として先にいろいろ指摘することで、人類の平和のために貢献できるんじゃないか。こんな無根拠で意味不明な使命感を抱いている。

ボーっとエスカレーターに乗っていて、こんな表示を見た。「ちかん・盗撮に注意！」。普通の人は、「ちかんや盗撮をされないように気をつけよう」というメッセージだと受けとめるだろう。しかし、「ちかんや盗撮のような不届きな行為をみかけたら、『何をしてるんだ』と叱ってやろう」という解釈も、可能なのである。ぼくはここで慌てふためく。「注意する」という動詞は、それこそ注意して使わないといけないじゃないか。

「えっ、塩田さん、主任に注意されたんですか？」。これも、不安をかきたてる言い方だ。ぼくがまわりの人からしょっちゅう注意されているということをちゃんと知っている人だったら、「なんだ塩田さん、また叱られたのか」と思うことだろう。しかし、「塩田さん、あの横暴な主任に、勇気を持って注意なさったんですか？」という解釈だって、おかしくないのである。この「注意される」のような「○○される」も、気をつけなければならない。

こんなことを、ほぼ一日じゅう考えている。人間は、これがものすごく好きだ、関心があってたまらない、という何かがあれば、そしてそれを自覚できれば、なんとか生きていけるのではないかと思う。

塩田雄大
しおだ たけひろ

1969年神奈川県生まれ。博士（日本語日本文学，学習院大学）。NHK放送文化研究所主任研究員。放送で用いる日本語の方針立案・策定に関連する言語調査・研究を担当。1997年から現職。『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂（1998年版・2016年版）などに従事。著書『現代日本語史における放送用語の形成の研究』（三省堂）。NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」枠内コーナー「気になる日本語」担当。